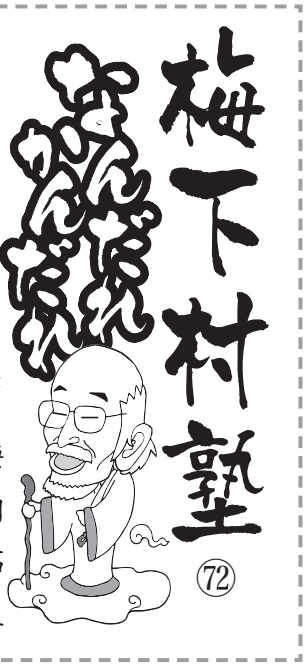
# 「森と水と命の惑星」国際会議

## ～地域と世界の心と魂を詠む～




### 東日本大震災から学ぶもの(8)

（歴史と俳句）

東日本大震災で被災地の人々がとった抑制と忍耐の行動は世界の人々の心に響いていた。気仙を始め、東北の人々のこのような態度はどのような歴史の根とつながっているのだろうか。世界の人々は、この想いを抱いております。気仙では、この想いの大切なことには気づいておりません。なぜなら、気仙では抑制と忍耐は当たり目のことと思っているからです。外の人々にいわれて、初めてそういうこともあるのだと思うだけです。

しかし、これを突き詰めて、掘り起こし、我々が消化して身につけないていかなければ復興への自立の道は開けて来ません。そのヒントが松尾芭蕉が江戸時代に磨き上げた俳句にあるのではないかとも考えられます。今や、俳句は世界中に広まっております。

それは、俳句の世界に、「自由と拘束」が創造にむすびつくことを感じているからです。そのむすびつく一瞬の「妙」への思いです。

〝古池や蛙（かわず）飛びこむ水のおと〟

日常生活のなかの一瞬をとらえて詠んでおります。我々は、この静と動との一瞬のむすびつきの「妙」に気がつきません。

〝閑（すずか）さや岩にしみ入る蝉の聲〟

閑と騒との一瞬の結び付きの「妙」です。

〝荒海や佐渡によこたふ天河（あまのがわ）〟

宇宙と地球とのむすびつきの感得の一瞬の「妙」です。

このような、むすびつきの「妙」の視点から、本紙の東海文芸の俳句、短歌、川柳、大船渡第一中学校の詠作品、の評を「梅下村塾」に掲載してきました。津波を詠んだ作品を送ってくれるという申し出が大船渡短歌会と東海新報社から知らせがありました。俳句、短歌、川柳の奥に潜んでいる、歴史の魂と心にふれてみたいと思います。

（伝統芸術と現代美術）

三内丸山遺跡の発掘調査は縄文文化に対する見方を大きく変えており、学術的議論は続いている。学術研究の議論とは別に、詩人である宗左近氏の「縄文物語」からはいろいろな響きが伝わって来る。

縄文文化は文字を持っていない。残された遺跡と膨大な土偶や土器から推察するよりほかはない。宗左近氏は土器に表現されている作品の文様から、これは現代芸術と通じ合うものがあるといっている。興味深い意見である。

想像をたくましくすると、縄文人は、現代科学の量子論や数学論のと通じるものがあると考えると、楽しくなって来る。フランス生まれの人類学者、レビ・ストロースが南米インデイオの複雑な婚姻関係を抽象数学論を使用して説明して「野生の思考」として述べている。

宗教学者の中沢新一氏の「野生の思考（カイエソバージュ）」にもこのことが述べられている。気仙の鹿踊り、鬼剣舞いなどの伝統芸術には、これらとつながるものがあると思う。現代絵画のジャクソンポロックのアクションペインティングにも「野生の思考」と通じるものがある。「森と水と命の惑星」国際会議でパネリストの鵜浦真佐子氏が提示した気仙の保育園の子供たちの描いたColors of Life Project～いのちの彩（いろ）プロジェクト～の絵にも、このようなイメージを浮かび出すことが出来ると考えている。

（覚悟と兆し）

東日本大震災への立ち上がりへの応援を「梅下村塾」で繰り返し述べてきた。それは、今まで外から差しのべられてきたいろいろな支援に対応する行動です。日々の困難な問題へ対応する中でのことです。ひとことではいいつくせない大きな問題です。地元の人々はもとより、気仙の外で生活し、活躍している人々との連携が大切なことはいうまでもありません。

東海新報がそのつなぎ役をしてくれていることは大切なことです。

2月15日（金）の世迷言では北朝鮮の核実験に始まる世界の核爆弾管理が極めて困難である現実を述べている。

これに関して、既に「梅下村塾㊻」で核保有税の制度を国連が導入すること真剣に考える時期に来ていることを述べた。「世迷言」が「凶器準備集合罪」の導入への「覚悟」が必要であると述べている。これの提案に大賛成である。

世界の草の根の人々が手をつないで生きる「覚悟」を育てなければならない。気仙からその「兆し」を生み出したい。